

# ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第十二号

Jeff Pippenger

2025-12-17

## 第12番

私の願いは、ペンテコステにおいてペテロが語り行っていたことの中に預言者ヨエルの証しが認められるような形で、その証しを提示することです。聖書はペンテコステでペテロが何を語り、何をしていたかについて明確であると私は確信していますが、彼がペンテコステのメッセージを『ヨエル書』の成就として位置づけたとき、後の雨の歴史においてペテロが預言的に何を型として示していたのかを理解しようとしているのです。

ペテロは神の残りの民の象徴であり、そのことはペンテコステにおいてだけでなく、マタイ16章のカイサリア・フィリピにおいても示されている。カイサリア・フィリピは、ダニエル書11章13~15節に位置づけられており、これら三節は、カイサリア・フィリピがパニウムと呼ばれていた歴史的時期に最初に成就した戦いを述べている。13~15節は16節に先行し、この16節はアメリカ合衆国における日曜法を指し示している。10節は1989年のソビエト連邦の崩壊を指し示している。ダニエル書11章10~16節は、1989年から日曜法に至るまでを表しており、その期間は同章40節の「隠された歴史」に当たる。

## BOLDFACEに隠された歴史

1798

そして、終わりの時には南の王が彼に攻めかかるであろう：

1989

しかし、彼の息子たちは奮い立ち、強大な軍勢を集める。北の王は戦車と騎兵、さらに多くの船を率い、旋風のように彼に攻めかかり、諸国に侵入して、押し流し、踏み越えていく。そして、そのうちの一人が必ずや来て、押し流し、通り抜ける。その後、彼は引き返し、その要塞に至るまで勢いをふるう。

## 2014年ラフィアの戦い

南の王は激怒して、出て行って彼、すなわち北の王と戦う。北の王は大軍を繰り出す。その大軍は南の王の手に渡される。南の王がその大軍を一掃したとき、彼の心は高ぶり、幾万もの者を打ち倒す。しかし、彼はそれによって強くはならない。

## パニオンの戦い（カイサリア・ピリピ）

北の王は戻って来て、以前よりも多くの兵を集め、幾年かを経て、大軍と多くの富を携えて必ずやってくる。

その時、多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。また、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就しようとして自らを高ぶらせる。しかし、彼らは倒れる。

こうして北の王が来て、土塁を築き、最も堅固に囲まれた町々を取る。南の軍勢はこれに持ちこたえることができず、彼の選ばれた者たちもそうであり、立ち向かう力は少しもない。

## 米国における日曜法

しかし、彼に向かって来る者は自分の意のままに行い、彼の前には「誰ひとり立つ者はない」。そして、栄光の地に「彼は立つ」。そこは彼の手によって滅ぼされる。彼はまた栄光の地に入り、多くの国々は打ち倒される。しかし、これらは彼の手から逃れる。すなわち、エドム、モアブ、そしてアンモンの子らの首長である。彼はまた諸国に手を伸ばし、エジプトの地は免れない。ダニエル 11:40, 10-16, 41, 42.

ペテロが予言的にカイサリア・フィリピ（パニウム）におり、またペンテコステが「後の雨」の時期であるとき、彼は四十節の「隠された歴史」の中に位置づけられる。私は、第十一章十一節に表されている現在のウクライナ戦争と、十三節から十五節のパニウムの来るべき戦い、すなわち第三次世界大戦へとつながるそれについて取り上げるつもりである。これらは1989年から日曜法までの外的出来事であるが、私たちは現在、1844年10月22日から1863年に教会が法的に組織されるまでの第三天使の歴史を特定している。

この線は、第三の天使の到来が9/11（1844年）から日曜法（1863年）に至るまでを示している。日曜法は、自由を宣言した奴隷解放宣言によって予表されており、すなわち自由が奪われる日曜法を予表している。最初の共和党大統領が宣言した自由は、最後の共和党大統領-日曜法の時に独裁者になると預言されている-によって奪われる自由を予表している。

我が国が、自国の統治原則を放棄して日曜法を制定するに至るとき、プロテスタントイイズムはこの行為によって教皇主義と手を結ぶことになる。それは、長い間、再び現実の専制へと躍り出る機会をうかがってきた暴政に命を与えることにほかならない。Testimonies 第5巻 711頁

紀元前742年は、イザヤ書7章8節の時の預言を開始したアルファの歴史であり、それは1863年にオメガの成就に到達した。紀元前742年、南王国ユダの王アハズは、北王国を構成する北の十部族に対して内戦に突入しつつあった。紀元前742年の歴史は、聖書における文字通りの栄光の地であるユダにおいて示されており、そこには文字通りのユダヤ人が住み、この箇所では邪悪で愚かな王アハズによって表象されている—このようにして1863年のオメガの歴史を型として示している。1863年のオメガの歴史は、アメリカ合衆国が聖書の預言における第六の王国である地の獣として支配している期間内に成就する。アメリカ合衆国は霊的な栄光の地であり、聖書的に霊的ユダヤ人とされるプロテスタントのキリスト教徒たちによって成り立っている。アルファの歴史である紀元前742年の南北間の内戦は、オメガの歴史である1863年の南北間の内戦を例証していた。これら二つの証言は、霊的な栄光の地が再び二つの陣営に分かたれる日曜法に至るまでの外的な歴史を示している。

紀元前742年、北方の勢力はイスラエルの北の十部族とシリアとの同盟を表しており、したがって外部勢力との同盟を象徴していた。これは、南北戦争において奴隷制支持の教皇制の支援が奴隷制支持の南部諸州に与えられたときに成就したことと同様である。紀元前742年のシリアの外部の同盟者と、南北戦争における教皇制の外部の同盟者は、MAGA主義に対する戦いにおける世界のグローバリストとグローバリストの民主党の同盟を指し示している。その戦いは、第四の、そして最も裕福な大統領が立ち上がった2015年に始まり、ダニエル書11章2節によれば、それによってGreciaの全域が揺り動かされた。その揺り動かは、ヨエル書における異邦人の目覚めを指し示している。「Grecia」と「heathen」は、獣と偽預言者と同盟して世界をハルマゲドンへと導く竜の権勢の象徴である。

2015年、異邦人は、ヨエルが「裁きの谷」とも呼んだヨシャパテの谷への預言的な呼びかけに目を覚まされた。2015年、ドナルド・トランプが大統領選への出馬を表明し、これによってグレスシアとして表されるグローバリストの帝国を刺激し、異邦人はハルマゲドンへ向けての行進を始めた。そしてそのわずか1年後、ダニエル書11章11節の成就としてウクライナ戦争が始まった。

紀元前742年と1863年の内戦は、聖書の預言における第六の王国の終焉を画する日曜法の歴史を指し示している。その第六の王国は革命戦争から始まったので、日曜法における第六の王国の終わりは、まさに内戦が起きているその時に革命戦争が繰り返されることを示している。内戦か革命戦争かの定義や呼称は、視点に依存する。民主党はいま、ローフェア、横領、詐欺、不法移民、プロパガンダを通じて行っていることをカラー革命と呼んでいるが、彼らのグローバリストの策動に反対する人々は、まさに同じ活動を「内乱」の扇動と見なす。アンティファは犯罪者か、それとも英雄か。

二つの歴史上の戦争は、最後の共和党大統領の時代に起こる、社会を分断する一つの戦争を表している。最初の共和党大統領の時と同様に、その戦いに勝利するのは最後の共和党大統領である。さらに、革命戦争の勝者でもあった初代大統領がその雛形でもある。民主党によれば、MAGA革命が現在の「社会不安」を生み出している。あなたの個人的な政治的傾向によって、現在の戦争は革命戦争とも内戦とも見なされうる。預言的にはその両方である。

1863年は日曜法を表しており、1844年もまた同様である。第三の天使が日曜法のメッセージを携えて到来したのが1844年だからである。1844年から1863年までの期間は、初めから終わりまで日曜法の刻印を帯びている。1846年に、ホワイト夫妻の結婚、安息日の遵守、そして姓がハーメンからホワイトへ変わったことは、1844年10月22日に結ばれた婚姻が成就したことを示し、その成就が、ちょうどマナによる三重の安息日の試練が紅海の洗礼に続く十の試練の始まりを示したのと同じように、第三の天使の試練の過程の始まりを画した。

マナは第一の試みであり、カデシュにおける第十の試みをも象徴していた。なぜなら、両者はいずれも第三天使のメッセージを象徴し、したがって日曜法をも示しているからである。

「荒野での長い滞在の間、イスラエルの民は毎週、安息日の神聖さを心に深く印象づけるための三つの奇跡を目の当たりにした。すなわち、第六日にはマナが二倍降り、

第七日には全く降らず、安息日のために必要な分は甘く清らかに保たれたが、他の時にそれを残しておくに用いるに適さなくなったのである。」 族長と預言者、296頁。

十の試練の第一は、「マナ」の試練であり、黙示録十四章の三天使の三重のメッセージを表していた。マナと同様に、天使たちは週の第一日における礼拝に対する三重の警告を表している。三重のマナの奇跡は「安息日の神聖さを彼らの心に印象づけることを意図していた」ものであり、これはもちろん第三の天使の意図である。マナによって表された三つの奇跡の第一は、天のパンを「食べる」ことに関わっており、この「食べる」ことは後の雨の期間におけるアルファの象徴である。第二の奇跡は、第二の天使のメッセージを表しており、靈感が言葉や句を「二重にする」ことによって、バビロンの二度の倒壊によって表される時期を印づけるためである。というのも、「バビロンは倒れた、倒れた」からである。第二の奇跡は、第六日にマナの量が「二倍」になったことであった。第三の奇跡は、第七日安息日のパンが保存されたことであった。

三人の天使の型として、マナは第一の天使であり、したがって全体の物語、すなわち黙示録14章における三人の天使すべての物語を含んでいなければならない。第一の天使は、三人の天使のメッセージ全体のフラクタルである。フラクタルとは、複雑な幾何学的形状であり、部分に分割でき、その各部分が全体の縮小版の写しになっているものをいう。この性質は自己相似性と呼ばれる。フラクタルは、いくら拡大しても精緻な細部が現れることが多い。フラクタルは、数学、生物学、物理学、地質学、化学、天文学、工学など、他にも多くの分野で見られる。

黙示録14章の三天使に見られる「三段階の構造」は第一の天使のメッセージの中に表されており、したがって第一の天使は三天使の「フラクタル」となっている。ダニエル書の最初の三章は、それぞれ第一、第二、第三の天使のメッセージを表しており、ダニエル書1章にも、これら三章に表されているのと同じ「三段階の構造」が含まれていて、これは三天使が第一の天使に関して示しているのと同様である。

マナの三重の奇跡は食べるためのものであり、ダニエル書1章は食べることについてである。ダニエルは、バビロンの食事ではなく野菜を選ぶことで、食事の試験に合格した。その後、彼は外見によって試され、彼の顔つきは、バビロンの食物を食べた者たちの顔つきと明確に区別されるに至った。第二の天使のメッセージは、二つの階級が形成されやがて顕現する分離の歴史の中で、バビロンから分離するよう呼びかけるものである。そのダニエルに対する第二の試験は、ネブカドネザルに関する第三の試験へとつながった。これは1章における第三の試験であり、3章の金の像の試験を型取っている。ホワイト夫人はこの金の像の試験を、繰り返し、第三天使のメッセージである日曜法と同定している。ダニエル書1章は、ダニエル書の最初の三章のフラクタルであり、これら三章は黙示録14章の三天使を表している。そして第一の天使とダニエル書1章は、三天使と三章全体の双方のフラクタルでもある。

荒れ野での長い旅の間、イスラエルの民は毎週、安息日の神聖さを彼らの心に印象づけるために備えられた三重の奇跡を目にした。すなわち、第六の日にはマナが二倍の量降り、第七の日には降らず、安息日のために必要な分は甘く清らかなまま保たれた。これは、それ以外の時に少しでも残しておくに使用に適さなくなったのに対してである。

マナが与えられた際の事情に照らして、私たちには、安息日が、多くの者が主張するようにシナイで律法が与えられたときに制定されたのではないことを示す決定的な証拠がある。イスラエル人はシナイに来る以前から、安息日が自分たちに義務づけられていることを理解していた。安息日にはマナが降らないため、その備えとして毎週金曜日に二倍の量のマナを集めることを義務づけられたことで、休息の日の神聖さが絶えず彼らに印象づけられた。そして、安息日に民の一部がマナを集めに出て行ったとき、主は「いつまであなたがたは、わたしの戒めとわたしの律法を守ることを拒むのか」と問われた。Patriarchs and Prophets, 296.

マナを集めて食べることは、ヨハネの黙示録10章でヨハネが天使の手から小さな巻物を取り（集め）、それを食べることを象徴している。

そこで私は天使のところへ行き、彼に言った。「その小さな巻物を私にください。」彼は私に言った。「取って食べなさい。そうすれば、それはあなたの腹を苦くするが、あなたの口には蜜のように甘い。」ヨハネの黙示録 10:9

ジョンはまず天使のもとへ行行って頼まなければならず、次にその小さな書を「取る」必要があり、そしてそれを「食べる」必要があった。ジョンは、天使のもとへ行行って頼むことによって第一の天使の三つの段階を表し、その後「取る」という第二段階と「食べる」という第三段階が続く。集めること、または食べることは、マナに関する三つの試みの第一であるが、その中には三つすべてのマナの試みのフラクタルが含まれている。マナを集めて食べることは、ジェレマイアを象徴している。

私はあなたの御言葉を見だし、それを食べました。あなたの御言葉は私の心の喜びと楽しみとなりました。私はあなたの名によって呼ばれているからです。万軍の主なる神よ。エレミヤ書 15:16.

エレミヤが探し求め、続けて小さな書を求めたことによって、彼の「言葉は見いだされた」。マナが集められたとき、彼の言葉は見いだされた。マナを集めて食べることは、彼に与えられた書を食べたエゼキエルを象徴しており、そうすることによって、書を食べるのを拒むことは反逆の家であることを示している。

「しかし、お前、人の子よ、わたしの言うことを聞け。あの背く家のように背く者となるな。口を開け、わたしが与えるものを食べよ。」私が見ると、見よ、一つの手が私のもとに差し伸べられた。その手の中に巻物があった。彼はそれを私の前に広げた。そこには表にも裏にも文字が記されており、その中には嘆きと悲しみとわざわいが記されていた。さらに彼は私に言った。「人の子よ、見つけるものを食べよ。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語れ。」

そこで私は口を開くと、彼は私にその巻物を食べさせた。そして彼は私に言った。「人の子よ、腹いっぱい食べ、わたしがあなたに与えるこの巻物であなたの腹を満たしなさい。」そこで私はそれを食べた。すると、それは私の口に甘く、蜂蜜のようであった。エゼキエル書 2:8-3:3

もしエゼキエルがその小さな書を食べることを拒んだなら、彼は反逆の家に属することになるだろう。そして、彼が食べるべき「書」の「巻物」は「嘆き、悲しみ、災い」と表されており、終末時代における三重のメッセージを示している。終末時代の三重のメッセ

ージとは黙示録14章の三天使のメッセージであり、エゼキエルがそれら三つのメッセージを提示する文脈は、イスラムと第三の災いの文脈である。その三つのメッセージにはアルファとオメガがあり、第三は「災い」で、イスラムの主要な象徴であるから、アルファはオメガと一致しなければならない。ゆえに「嘆き」は、第七のラッパと第三の災いの到来とともに9/11で始まった嘆きを表しており、それは最後の七つの災いへと段階的にエスカレートしていくことになる。黙示録11章の「地震」である日曜法の時に、第三の災いは速やかに来るのであり、靈感は、イザヤ書10章の不義な法令がその日曜法であることを教えている。その節は、不義な法令を制定する者に「わざわいあれ」と述べて始まっている。

マナを食べることは三つの試練の第一であり、第二は備えの日における「倍にする」ことであった。では、彼らは何のために準備していたのか。彼らは第三天使のメッセージである安息日の試練に備えていたのである。

その三重の奇跡はまた、十の試験のうちの最初、すなわちアルファの試験でもあった。神は第一段階でマナを与え、第二段階では「二倍の分」を与えたが、第三段階では何も与えなかった。第三の試験は最初の二つの試験とは異なる。というのも、第三はリトマス試験だからである。これら三つの試験は、最初のカデシュへと至る十段階の試験過程のアルファを表している。

さまざまな神学者の著作を調べると、最初のカデシュで終わる十の試みの一覧が数多く見つかる。ほとんどは紅海を十の試みの一つに含めており、なかには災いの期間中、紅海以前の歴史的な道標を含めるものもある。それらはすべて間違っている。

最初の試練はマナである。パウロは、紅海を渡ったことは洗礼であったと述べている。

さて、兄弟たちよ、わたしは、あなたがたに次のことを知らないでいてほしくない。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜けた。そして皆、雲の中と海の中でモーセに属するバプテスマを受けた。コリント人への第一の手紙 10章1、2節

モーセはイエスを予表しており、イエスの洗礼は、食欲の試練をもって始まりそれを強調する、三重の性質をもつ試練の過程を示している。十字架はエジプトでの過越によって予表されていた。彼らが紅海の向こう岸に出たとき、キリストは初穂のささげ物として復活された。洗礼者ヨハネの手によって水の墓から上がったとき、キリスト（初穂のささげ物）は四十日間にわたる試練の過程を始められた。ご自身の洗礼によって予表されたように復活された後、キリストが弟子たちと面と向かって交わられたのは四十日間であった。この試練の過程は紅海を渡った後に始まる。それは、キリストが水から上がられるや否や御霊によって荒野に追いやられたのと同様に確かなことである。

キリストにとって最初の試みは食欲であった。というのも、天からのパンは、アダムが倒れたまさにその点で、ご自身の油注がれた務めを担われたからである。紅海のための最初の試みは三重のマナの試みであり、それは天からのパンに対する三重の試みを象徴している。キリストの試みは水から上がった後に始まったので、十の試みもまた、彼らが水から上がった「後」に始まらなければならない。そのときキリストは、食欲という文脈の中に置かれた三重の試みに直面されたが、これは、御霊が古代イスラエルをエジプトから追

い立てて荒野へと入らせた後に始まったマナの三重の試みが象徴しているとおりである。カデシュで頂点に達する十の試練がどの反逆を表しているのかについて推測する他のリストは、アロンの金の子牛の反逆をその十の試練の一つと見なしているが、これは誤りである。

金の子牛の挑発は二つの試練を表している。それは金の子牛の象徴性の不可欠な要素である。人々が神には見られないと思って行った偶像崇拜の後に、モーセが戻ってきた。その後、人々は、モーセによって表される神の目前で、なおも偶像崇拝者であり続けることを選んだ。

二度にわたって激化した反逆のさなか、レビ族が聖所の務めに専任されるに至ったとき、私たちは部族間における預言的な分割を目にする。というのも、その反逆までは、聖所の務めは各部族の長子が担うことになっていたからである。もはやそうではなくなった。今や、忠実なレビ族が聖所を維持することになる。「分割」、すなわち「二つ」への分離は、金の子牛の預言的な特性の一要素である。

アロンの反逆は、イスラエル北王国の初代王ヤロブアムの反逆を予表していた。ヤロブアムは金の子牛を「二つにし」、一つをベテルに、もう一つをダンに据えた。アロンとヤロブアムは並行する歴史を表しており、それは獣の像の形成の歴史である。獣の像の歴史は、アメリカ合衆国の日曜法によって二つの時期に分けられ、その中で成就する。獣の像は、教会と国家の結合の象徴であり、それはまずアメリカ合衆国で確立され、その後世界でも確立される。

獣の像の象徴には、常に分裂が伴う。アロンの場合はレビ族の分離であり、ヤロブアムの場合は十二部族が南の二部族と北の十部族に分かれることだった。

その教会と国家の関係の象徴は、ヨハネが『黙示録』で「獣の像」と呼んでいる。アロンとヤロブアムの金の子牛は獣の像であり、彼らが像としたその獣はバビロンである。なぜなら、聖書の預言における最初の王国は、ダニエル書2章で「金」の頭として表されているからである。獣の像は二つの試練を表している。というのも、その試練はまず地の獣——アメリカ合衆国——に臨み、その後、黙示録13章でアメリカ合衆国が世界に獣の像を設けることを強いるからである。最初の試練はアメリカ合衆国、その次は世界である。

「宗教の自由の地であるアメリカが、良心に強制を加え、偽りの安息日を尊ぶことを人々に強いる点で教皇制と手を結ぶようになると、地球上のあらゆる国の民はその手本に倣うよう導かれるであろう。」 Testimonies, 第6巻、18.

「諸外国はアメリカ合衆国の手本に倣うだろう。たとえ米国が先頭に立つとしても、同じ危機が世界の至る所で私たちの民に及ぶであろう。」 『証言』第6巻、395頁。

金の子牛の反乱は二重であり、最初のカデシュでの第十の最終試練へとつながる、最初の九つの試練のうち二つを示している。アロンとヤロブアムの反乱を「line upon line」で重ね合わせると、大祭司であるアロンは教会を、イスラエルの王であるヤロブアムは国家を表していることがわかる。この二つの線が合わさることは、教会と国家の結合の象徴である。ヤロブアムの二つの祭壇はベテル（教会を意味する）とダン（裁きを意味する）

)に設けられ、両者合わせて教会と国家の結合を表している。これらの点を踏まえて、十の試練を特定していく。

この十の試みは、安息日の休み（ヘブル人への手紙3～4章）の文脈に置かれている。それらは、マナに関する三重の奇跡と安息日に関するその教訓から始まり、第十の試みである最初のカデシュで終わる。その最初のカデシュは聖書にいう「挑発の日」であり、パウロは最後の反逆を安息日の試みという文脈に位置づけている。アルファの試みはマナによって象徴される安息日であり、最初のカデシュにおける第十、すなわちオメガの試みもまた安息日の休みであった。アルファとオメガは、常に終わりが初めと結びついていることを表している。

それゆえ（聖霊が言われるとおりに、「きょう、もしあなたがたがその御声を聞かばならぬ、荒野での試みの日、あの反抗のときにあったように、心をかたくなにしてはならない。あなたがたの先祖は私を試み、私をためし、四十年の間、私のわざを見た。それゆえ私はその世代に憤り、こう言った、『彼らはいつとも心に迷い、私の道を知らない。』それで、私は怒りにおいて誓った、『彼らを私の安息に入らせはしない。』」）

兄弟たちよ、あなたがたのうちのだれかが、生ける神から離れてしまう不信仰な悪い心を抱くことのないよう、気をつけなさい。しかし、「きょう」と呼ばれている間は、日ごとに互いに励まし合いなさい。罪の欺きによって、あなたがたのうちのだれも心がかたくなにされないためです。というのも、初めの確信を終わりまで堅く保つなら、私たちはキリストにあずかる者とされるからです。

こう言われています。「きょう、もしあなたがたが神の声を聞かばならぬ、反逆のときのように心をかたくなにしてはならない。」というのも、聞いたにもかかわらず反抗した者たちがいたからです。ただし、モーセに導かれてエジプトを出た者が皆そうしたわけではありません。では、四十年の間、神が怒っておられたのは誰に対してだったのでしょうか。それは、罪を犯し、そのからだは荒野に倒れた者たちではありませんか。また、神の安息に入ることはないと言われたのは誰に対してだったのでしょうか。信じなかった者たちに対してではありませんか。このように、彼らが入ることができなかったのは、不信仰のゆえであったことがわかります。

それゆえ、私たちは恐れよう。私たちに、その安息に入ることの約束が残されているのだから、あなたがたのうちのだれかがそれに達しそこなったと見なされることのないように。というのも、私たちに彼らにも福音が宣べ伝えられたが、宣べ伝えられた言葉は、それを聞いた人々のうちで信仰と結びついていなかったため、彼らには益とはならなかったからである。

というのは、信じた私たちは安息に入るからである。彼が言ったとおりに、「わたしは怒りにおいて誓った、『もし彼らがわたしの安息に入るなら』」。世の基が据えられて以来、御業はすでに成し終えられていたにもかかわらず、彼はある箇所（第七日）についてこう語っている、「神は第七日に、そのすべての御業から休まれた」。そしてまたこの箇所（第七日）で、「もし彼らがわたしの安息に入るなら」。

それゆえ、その中に入るべき者がなお残っており、最初にそれが宣べ伝えられた人々は、不信仰のためにそこに入らなかった。さらに、彼はダビデにおいて、「今日、長

い時の後に」と言って、ある日を定めている。すなわち、言われているとおり、「今日、もしあなたがたが彼の声を聞けなら、あなたがたの心をかたくなにはならない。」

もしイエスが彼らに安息を与えていたのなら、その後別の日について語ることはなかっただろう。

それゆえ、神の民のために安息がなお残されている。神の安息に入った者は、神がご自身のわざをやめられたように、自分のわざをもやめたのである。だから、その安息に入るよう努めよう。不信仰の同じ模範に倣って、だれも倒れることがないように。ヘブライ人への手紙 3:8-4:11。

「『反抗の日』に、ヨシュアとカレブのメッセージは拒絶された。この箇所は、聞いたメッセージを信じないために中に入らない人々の一群を念頭に述べられている。メッセージは『安息』として表されている。」

主に忠実で、熱心で、愛に満ちた奉仕をささげようとしぬ者は、この世においても来たるべき世においても、霊的な安息を見いだすことはない。「それゆえ、神の民には安息がなお残されている。……それゆえ、その安息に入るために、私たちは努めよう。同じ不信仰の例に倣って、だれも落後することのないように。」ここで語られている安息は、恵みの安息であり、その処方に従うことによって得られる。「勤勉に励め。」パシフィック・ユニオン・レコーダー、1901年11月7日。

「安息」とは、ヨシュアとカレブのメッセージに代表されるメッセージである。パウロは、第七日安息日に関連する真理を、荒野で死ぬ運命にあった者たちによって退けられた「安息」のメッセージの象徴として用いている。

「きょう、もしあなたがたが彼の御声を聞けならば」という表現は、御霊の声を聞く者すべてに向けた黙示録の強調と同じであり、それは御霊のメッセージを聞くことであり、それは後の雨のメッセージ、すなわち「安息」のメッセージである。カデシュでその声が響いたとき、反逆者たちは自分たちをエジプトへ連れ戻すための新しい指導者を選んだ。この挑発の歴史は詩篇95篇と、パウロがヘブル人への手紙で取り上げている。この歴史は、古代イスラエルが第十の試練で失敗したことを示している。第十の試練の最初の（アルファの）試験は、マナの三重の奇跡から始まった。それは、三天使のメッセージ、神の律法、安息日の休み、天のパン、従順と審判を表していた。そして第十の試練の最後は「安息」の試験であった。シスター・ホワイトが述べるところの恵みの「安息」は、後の雨の象徴である。カデシュは、「行に行」で提示される後の雨のメッセージを受け入れるか拒むかという試験の象徴である。

行に行を重ねて「安息」とは、後の雨として表される聖霊の注ぎである。「安息」はまた、第七日の安息日であり、後の雨の期間に忠実な者たちに押される、まさにその印である。「安息」は、彼らの罪が永遠に消し去られるとき、十四万四千に与えられる力を表す恵みでもある。その恵みは、聖化を表す与えられる力であるだけでなく、悔い改めた魂の罪を取り除くためにキリストの血が用いられるときに義認を与える恵みでもある。恵みの「安息」は、キリストの義のメッセージであり、罪を犯さずに生きるための恵み（力）を与え、ラオデキヤの者をフィラデルフィアの者へと変える恵みである。義認の恵みによ

ってひとたび変えられるなら、かつてのラオデキヤの者は、フィラデルフィアの者として、恵みの力によって、栄化へと至る聖められた道を歩む。「安息」は、「真実における信仰による義認」として表される第三天使のメッセージである。そうである以上、カデシュは1888年を指し示していた。

最初のカデシュは、「福音」である「安息」のメッセージを示している。永遠の福音とは、「礼拝者を二種に分け、そしてその区別を明らかにする三重の試練の過程を導入するキリストの働き」である。最初のカデシュにおける「安息」の永遠の福音のメッセージは、罪・義・裁きについて人々を悟らせる聖霊の三重の働きに導かれる、永遠の福音の三重のメッセージを表している。これら三つの段階は、マナの試みの三段階とまったく同一である。

十の試練は、神の律法、安息日、そして神のメッセージを食べて消化するという人類の責任を強調する三重の試練の過程から始まる。十の試練の最初のもは三重であり、第十のものも同様であった。最初の試練はマナを用い、第七日安息日を高める天のパンの象徴としている。最後の試練は「安息」を用い、それを日曜令で頂点に達する後の雨の最終試練の過程の象徴とする。そこでは、天のパンを代表する者たちが、安息日の旗印として高く掲げられる。

十の試練の始まりと終わりは、安息日と、安息日に結びついた福音のメッセージ、すなわち第三の天使の永遠の福音を強調している。最初のカデシュは十の試練のオメガである。したがって、十の試練のアルファも同じ特質を備えていなければならない。カデシュは1863年を表しており、そのとき主はご自身の御業を終え、ご自分の民を家に連れ帰ることを望まれていたが、約束の地への入場は遅らされた。

以下の聖句を読むと、神が古代イスラエルをどのように見なしておられたかがわかるでしょう。

「主はヤコブをご自分のものとして選び、イスラエルをご自分の特別な宝とされた。」詩編135:4。

「あなたは、あなたの神、主のための聖なる民である。主は、地の上にあるすべての国々にまさって、あなたをご自身の特別な民として選ばれた。」申命記14:2。

「あなたがたは、あなたの神、主にとって聖なる民である。あなたの神、主は、地の表にいるすべての民のうちであって、ご自身の特別な民となるように、あなたがたを選ばれた。主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。というのは、あなたがたはすべての民のうちで最も少なかったからである。」申命記 7:6、7

「私とあなたの民があなたの御前に恵みを得たことは、ここで何によって知られるのでしょうか。あなたが私たちと共に行ってくださいることによるものではありませんか。そうして、私とあなたの民は、地の全面にあるすべての民から区別されるのです。」出エジプト記 33:16

「古代イスラエルがどれほどたびたび反逆し、彼らをお選びになった神の命令に耳を貸さなかったために、何度となく裁きが下り、何千人もが打ち倒されたことでしょう

！この終わりの時代における神のイスラエルは、この世と交わって神に選ばれた民であるしるしをすべて失ってしまうという、絶えざる危険の中にあります。テトス2章13-15節をもう一度読みなさい。ここで私たちは、神がご自身のために特別な民をきよめておられる終わりの日々へと導かれます。私たちは古代イスラエルがしたように、神を怒らせるのでしょうか。私たちは神から離れてこの世と交わり、私たちの周囲の国々の忌むべきわざに従うことによって、その御怒りを自分たちの上に招くのでしょうか？」『証言』第1巻 282、283頁。

ホワイト夫人はこう問いかけています。「古代イスラエルがしたように、私たちは神を怒らせるのでしょうか。」私たちは世と交わることによって神を怒らせます。世はエジプトによって象徴されており、そこはカデシュで反逆した者たちが、自分たちをそこへ連れ戻す指導者を求めた、まさにその場所です。1863年には、エジプトへ帰ろうとする願望と新しい指導者の選出は、靈感によって、世と結びつこうとする願いとして表されています。

私たちが今検討している箇所の前には、古代イスラエルが安息に入らなかったことについてのホワイト姉妹の注解が置かれている。彼らの絶え間ない反逆という文脈の中で、彼女は、神がご自分の花嫁とどのように関わりたいと望んでおられたかを示す聖句を提示したが、その花嫁は拒んだ。以下の箇所は、私たちが今しがた読んだ内容への導入となっている。

彼女が記している箇所には、次のようにある。「神はご自分の民に、ただ神だけに信頼するよう求められた。神に仕えない者たちから助けを受けることを、神は望まなかった。」1863年、ラオデキア的なミラー派アドベンティズムは、彼らの若者たちがアメリカ史上最も多くの犠牲者を出した戦争に徴兵されるのを防ぐための取り組みに支援を受けるために、アメリカ合衆国政府と協力関係を結んだ。

ここには、神が古代イスラエルに与えた警告が記されている。彼らが荒野でこれほど長くさまようことは、神の御心ではなかった。もし彼らが従い、神に導かれることを喜んでいたら、神は彼らをただちに約束の地へと導かれただろう。しかし、彼らが荒野でたびたび神を悲しませたため、神は怒りのうちに、全く神に従った二人を除いて、彼らをその安息に入らせないと誓われた。神は、ご自身の民がご自身のみ信頼することを求められた。神は、彼らが神に仕えない者たちから助けを受けることを望まなかった。

エズラ記4章1-5節をお読みください。「さて、ユダとベニヤミンの敵対者たちは、捕囚の子らがイスラエルの神、主のために神殿を建てていることを聞いたとき、ゼルバベルと父祖の家の長たちのもとに来て、こう言った。『私たちもあなたがたと一緒に建てさせてください。私たちもあなたがたと同様に、あなたがたの神を求めており、私たちをここへ連れて来たアッシリアの王エサルハドンの時以来、彼にいけにえをささげてきました。』しかし、ゼルバベルとエシュア、そしてイスラエルの父祖の家のほかの長たちは彼らに言った。『私たちの神のために家を建てることについては、あなたがたには私たちと関わる分はない。私たち自身が力を合わせて、ペルシアの王キュロスが私たちに命じたとおりに、イスラエルの神、主のために建てる。』そこで、その地の民はユダの民の意気をくじき、建築を妨げ、彼らに敵対して顧問を雇い、その

目的を挫こうとした。」

エズラ記 8:21-23：「そこで、私はアハワ川のほとりで断食を宣言した。私たちが私たちの神の前で身を苦しめ、私たち自身のためにも、幼子たちのためにも、また私たちの全財産のためにも、正しい道を神に求めるためであった。道中の敵に対して私たちが助けるよう、王に兵士と騎兵の一隊を求めるのは、私は恥じた。というのも、私たちは王にこう言っていたからである——『私たちの神の御手は、神を求めるすべての者の上にあって幸いを与える。しかし、神を捨てるすべての者には、その力と怒りが臨む。』それで私たちはこのことのために断食し、私たちの神に願い求めた。すると、神は私たちの願いを聞き入れてくださった。」

この預言者とこれらの父祖たちは、地の民をまことの神を礼拝する者とは見なさなかった。彼らが友好を表明し、助けたいと望んだとしても、神の礼拝に関わるいかなる事柄においても彼らと連合することは敢えてしなかった。神の宮を建て、その礼拝を回復するためにエルサレムに上るに際して、道中の助力を王に求めることはせず、断食と祈りによって主の助けを求めた。彼らは、神がご自身に仕えようと努めるしもべたちを守り、栄えさせてくださると信じていた。万物の創造主は、ご自身の礼拝を打ち立てるのに敵の助けを必要とされない。主は不義のいけにえを求められず、主の前に他の神々を置く者の供え物をお受けにならない。

「『あなたがたは排他的すぎる』という言葉、私たちはしばしば耳にする。私たちは民として、魂を救い、真理へと導くためなら、どんな犠牲もいとわない。しかし、彼らと一致し、彼らの愛するものを愛し、世と友となることは、あえてしない。そうすれば、私たちは神と敵対することになるからである。」『Testimonies』第1巻、281、282。

ホワイ夫人は、カデシュの反逆に関する彼女の解説の中で、次のように述べている。「万物の創造主は、ご自身の礼拝を確立するためにご自身の敵の助けを必要としない。主は邪悪な者のいけにえを求めず、主の前にほかの神々を置く者の供え物を受け入れない。」1863年、ラオデキヤ的なミラーライト・アドベンチズムの運動は教会となり、国家に対して、さらには世界に日曜礼拝を強制することになる権力と同盟を結んだ。

今回の記事では、1844年から1863年に至る預言の時期の頂点である1863年に関わる預言の諸筋についての考察を続けます。

すでにあったものは、これからもある。すでに行われたことは、これからも行われる。日の下に新しいものは何ひとつない。「これこそ新しい」と言えるものがあるだろうか。それはすでに、われわれの以前の昔からあったのだ。神のなさることは、すべて永遠に続くことを私は知っている。そこに付け加えることも、そこから取り去ることもできない。神がそれをなさるのは、人が御前で恐れ敬うためである。今あるものは、すでにあったもの、これからあるものも、すでにあったもの。神は過ぎ去ったものを求められる。伝道者の書 1:9、10;3:14、15。